



和
漢
增
補
畫
本
寫
錄



ゆきなりや思ふは後乃人の心ひんふさぎ絶
あし。すくせらるひ。さうさじよわハね
ふふあひくへし。げんもまゝかゝるあつてさ
いあれや。答れをおれよりひんハ夫よりも
さうぞ。川海を海くべ。はつたはも一丈乃
堤も地を作らば。豈にさうとせさかん。五人の
池を。ふるひ。そのあさくを。さうも。何ぞ
あしや。さかんや。さうも。これハは集も

ま。は。書乃。さ。これ。た。た。た。た。と。と。と。
けも。種。お。免。園。の。母。あ。は。あ。さ。かんし
乃。お。人。これ。を。さ。う。け。ん。や。何。と。え。ん。縁
す。ま。ふ。と。つ。ま。さ。う。さ。う。あ。う。は。す。さ。さ。
な。あ。は。は。乃。ひ。ん。が。れ。あ。や。の。さ。は。乃
かりものして。磨ふり。れ。ま。さ。ま。



芳甫舎

繪本寶鑑發題

繪本寶鑑發題

凡畫有六法。一曰氣韻生動。二

曰骨力用筆。三曰應物象形。四

曰隨類賦彩。五曰經營位置。六

曰傳移模寫。得之心而運之筆

則可謂妙手矣。中間有橘宗重

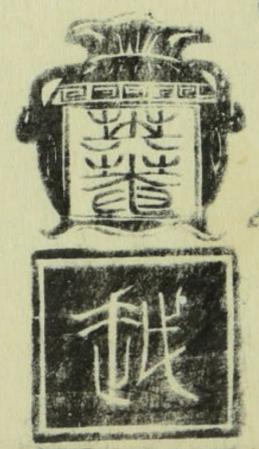
繪本寶鑑

者依貴人之需所撰斯書也。余
 來後去先而雖不相遇每閱於
 其書即非不感其為入盡心為
 已學道矣惜哉手澤久而殺青
 為之蠹縹緗為之德。余雖庸昧
 匪才竊正其丙乙補其闕畧削

其重複使長谷川氏圖焉志于
 畫圖者開卷之際六法不學而
 在焉斯且不忘于畫圖者當知
 往古之人品識畫圖之故事故
 今也繕寫校正而屬之書林鏤
 梓而以壽于世云。脊負享龍集

疆梧單闕畧維良辰

難波東軒藤貞漢由書



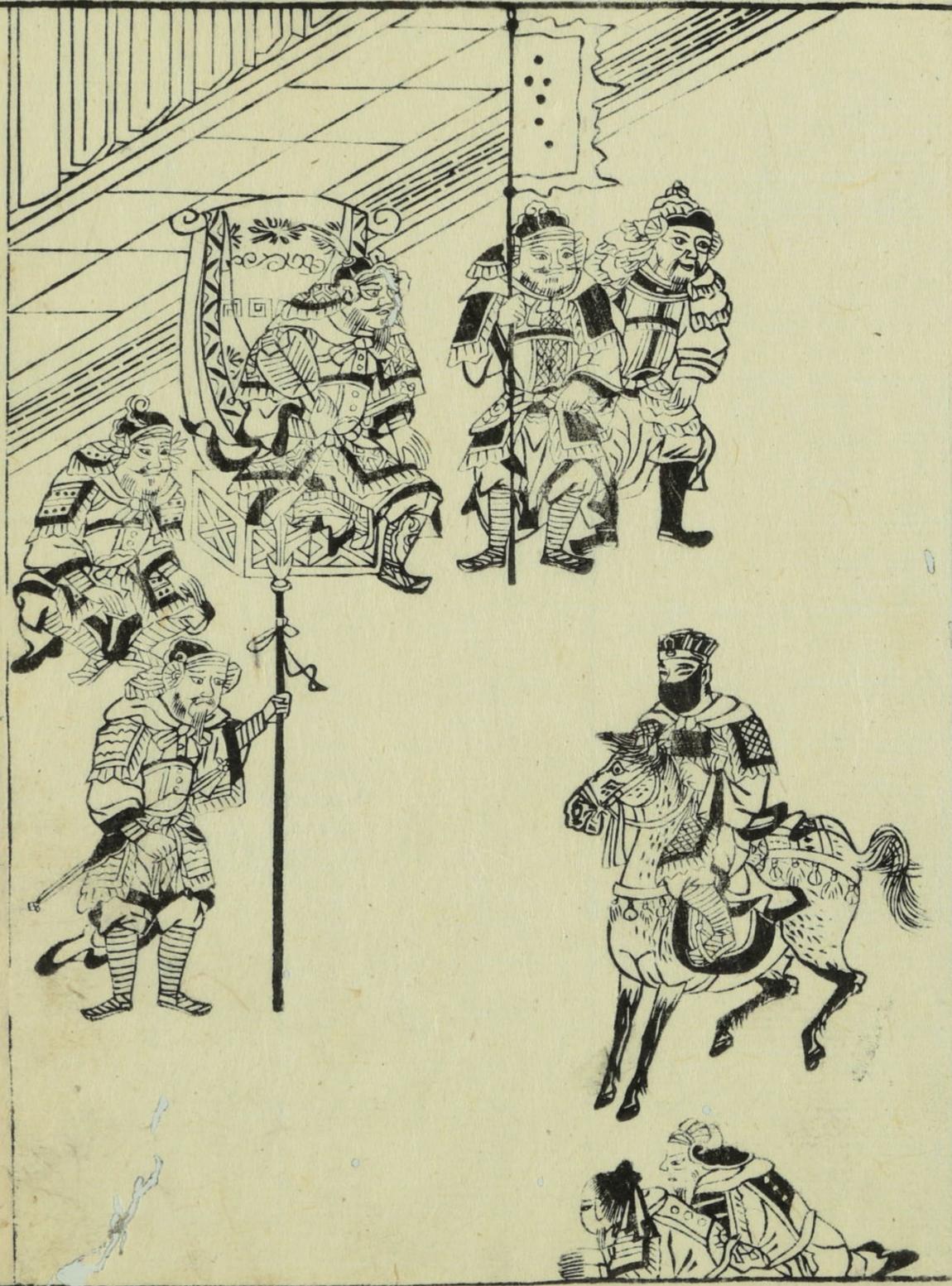
增補繪本寶鑑目錄

卷之一

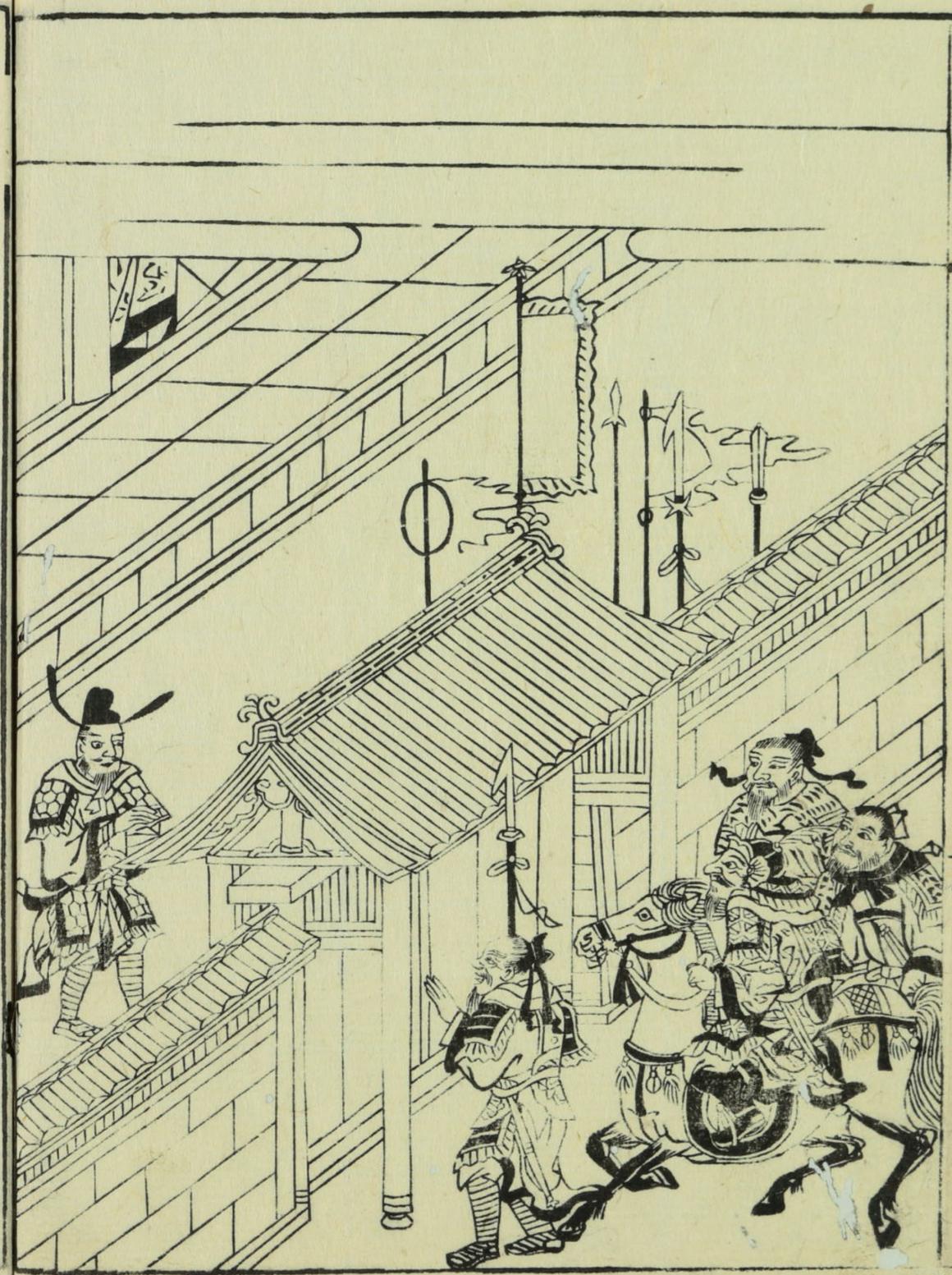
- 一 高祖寬仁
- 二 蕭何定律
- 三 樊噲桃園
- 四 桃源園
- 五 王者焯去
- 六 又聖人
- 七 三教聖人
- 八 畫蛇添足
- 九 小智局
- 十 鴨長明
- 十一 揚子畫馬

下と交りて者ありといふ内は終に項羽と
 を合し楚の懐王に降つて秦と河は時懐王
 法布と絢米をせり秦とせりて代勝人時先
 界目の國に函谷園まで付くといふ人者と王とせん
 とありきつるゆゑは天下とともふ人さか運うやる
 程の兵進み法布を先て函谷園に入つて霸と秦
 して責あり時よ秦乃三世皇帝の子嬰素車
 白馬よ乘せてる程は津糸せり法布子嬰を殺さん
 としとてる程は懐王の伯は能寛容せよとて
 わきばこれを殺さんと不祥ありとて軍奉り子嬰
 とく殺さん次は項羽これと殺さんとてるに項羽後

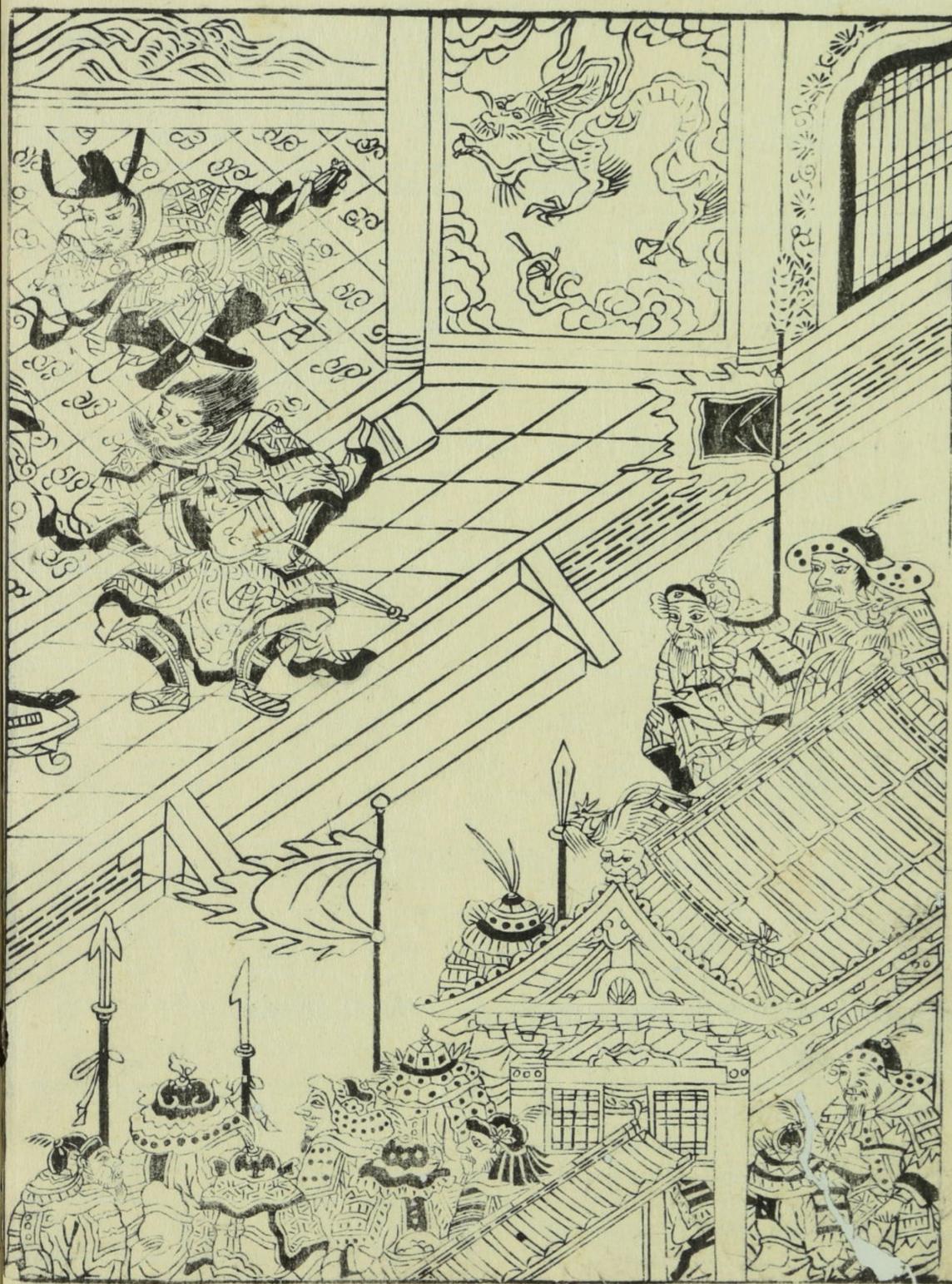
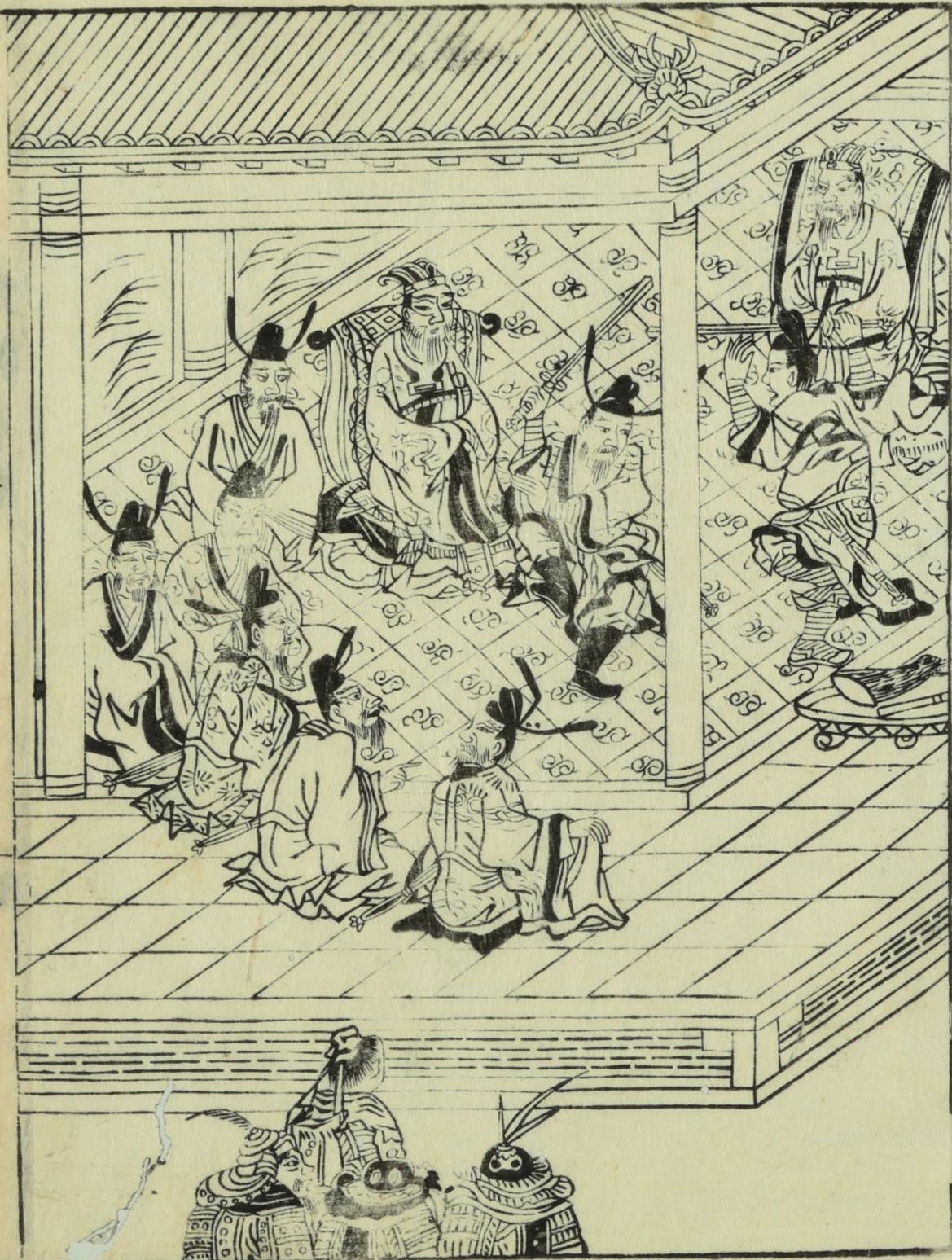
子進み函谷園と付破りてんとてる程は兵園を
 ちりて入つてとてる程は感陽と破りと申て項
 羽大よ怒り蒙陽とて人よとつて園と打破り
 志先して降し入ぬとて時よ程覇とよ軍といひてと
 幣十萬騎項羽は幣十萬騎なり時よ項羽は
 范増とて有項羽は説て曰る程山東は兵の時共
 財と貪つて兵を好し今園に入つて秦の城とては
 婦女と幸する事あり志先して降し吾も兵を
 らしむは就虎の氣有り此天子の氣あり志先して
 べしといふ程は項羽の運のさかめよは項羽の伯頂
 伯といふ者も程の兵強者と中者ありしは也



城總本卷一



城總本卷一



明倫彙編
家範典
卷一

項在入る日軍中喜樂あり我劔を舞とまらんと
 劔とそばめてやりすればはる相とこころ人の心は
 張る内海せり項伯の許して先と劔と振と舞
 項在る相乃そげはる相伯の相を敵の相
 項在すははくしてはる相と伐とわたりはる相
 軍門は出ぬ樊噲うまひ入り樊噲は日の夕
 いんと向張るははくしてはる相と樊噲は我を入
 るる小死をえんとて劔と帯肩と擁とく軍門は
 いんと決衛士も止くはる相樊噲は肩を衛士
 をつきたとて突と入る相と帷と振と立たり目と
 して項王とるる相の髪は逆は指服は書く製たり

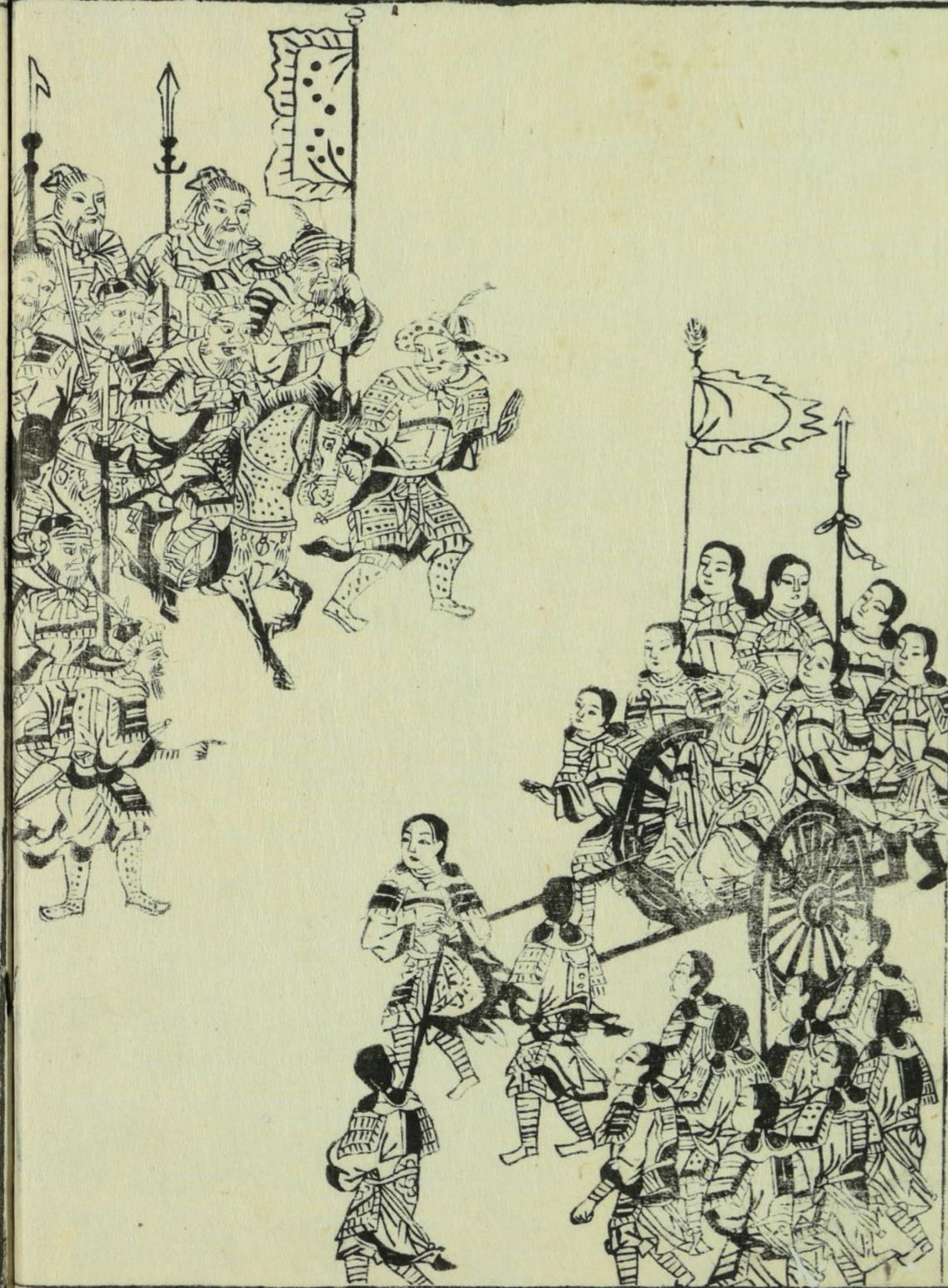
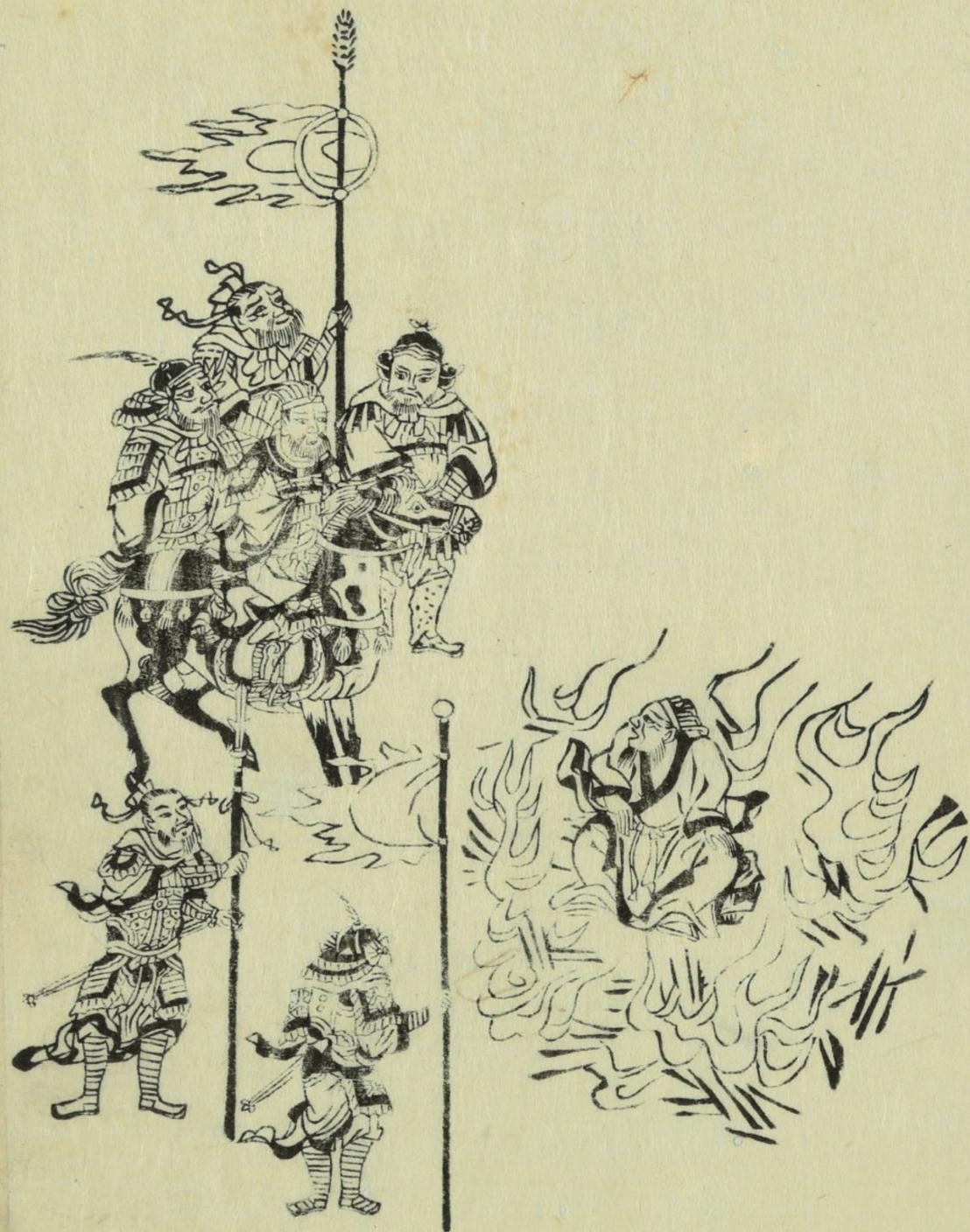
項王の曰壯多は士りれははる相とすあはる相は樊
 噲立ありははくはる相とはる相の肩は書とささくはは
 せられとて劔と振と切て喘きり項王又曰壯士
 又飲さんやと樊噲は白髪死とて辞せははる相
 何ぞ辞とるにこころははる相と虎狼の心あり人は
 殺し刑とる事と好あり人よ天下ははる相とははる相
 王法ははる相と縛して先奉を破て感陽よんとのと王
 と人とははる相と今沛公先奉を破く覇上は軍して
 大王の身とと待たれは苦勞とつて切らる事
 かのどくあつたよいまは封侯の者てはる相と細説は
 却ら有刃の人と謀見と決此とる奉ははる相と

軍春より奪りて日月は彰城より雨をて伐て入る
 貸之を人となれく日くは酒會をる次次王は意派
 伐く漢の軍と破り十餘万人を殺せ項王の軍
 兵漢王を圍ひしり三重あり於是大内西北より
 起く本と杉屋と奪く沙石と吹揚る火立の
 日冥して晦闇なり漢王は此時をきりと切
 出原程の軍と馳殺に其際も漢王は兵數十餘斗
 して落られし項程は漢王の家と奪く於漢王
 と逃げしり漢王急よ北より車より孝惠尊皇の
 二人の小子をなまで落れしりと勝ると云人抱上
 く車は急て痛くも漢王はいつに急ありとて車と

急よ逃ぐべし二人の者といそぐ棄てると言ひきり
 漢王の居る所はいつらに於てはひきん一法は北
 由り漢王は父大公母呂公も虜となりしり漢王
 言陽といふおよはるる項王と和法せんと請れ
 けしる項程は范増が法よりく強き次時は漢王は
 既下陳平が謀よりく項程の忠臣范増を叛逆
 ありとてさうりせんとおひ項程が軍の使來りし
 と此大宰乃養食をみく強きせしり陳平使右
 とんく強き法ていつく昔垂父范増が使者なりと
 おりつとてさうに足すこは項程が使者なりとの養
 食を奪しつらゆられとて奪しとて食物を食せけ

且使者反りてけしと項羽は驚くは項王は
 ちりく陳平ハ范増と内通ありと云ふは項王は
 子孫臣の申をきりて范増は率兵あり
 て背子疽を病む死しぬ是項羽の忠臣と云ふ
 背北せり其妻ありては内通の大功の紀信と云
 人漢王は死す日事あり王の爲るは項羽と云
 うて是れはと云ふ人物は此車と惶と云ふ人
 と云ふ漢王はと感して夜女子二千人を甲冑と
 せせ東のけしりおしは項王は川つんで是をけしり
 紀信我漢王の命をたもてて項王は降参せり
 とのちり項王は陣中皆万策と呼んで漢王と

虜てんれば紀信あり項王怒て焼殺しぬ漢王膝
 云と河と海で張耳韓信の軍と一はありて又
 項羽と戦り或時大河とへて戦は漢王の方
 より項羽が兵と云ふは恐るる海と云ふは大膽
 病の名也と云ふ辱しめは大好大司る怒る
 大河と云ふは河と海と云ふは漢王の兵討つる大おの
 首と云ふはそれより漢王は才の勝利と云ふは
 漢王と云ふは項羽と相睦と云ふは天下と云ふは
 是れは二人と云ふは侯公と云ふは人々を云ふは
 先けきは項王怒りて河と海と云ふは漢王は母
 妻子と云ふは守りては張良陣平は曰く天下の



九

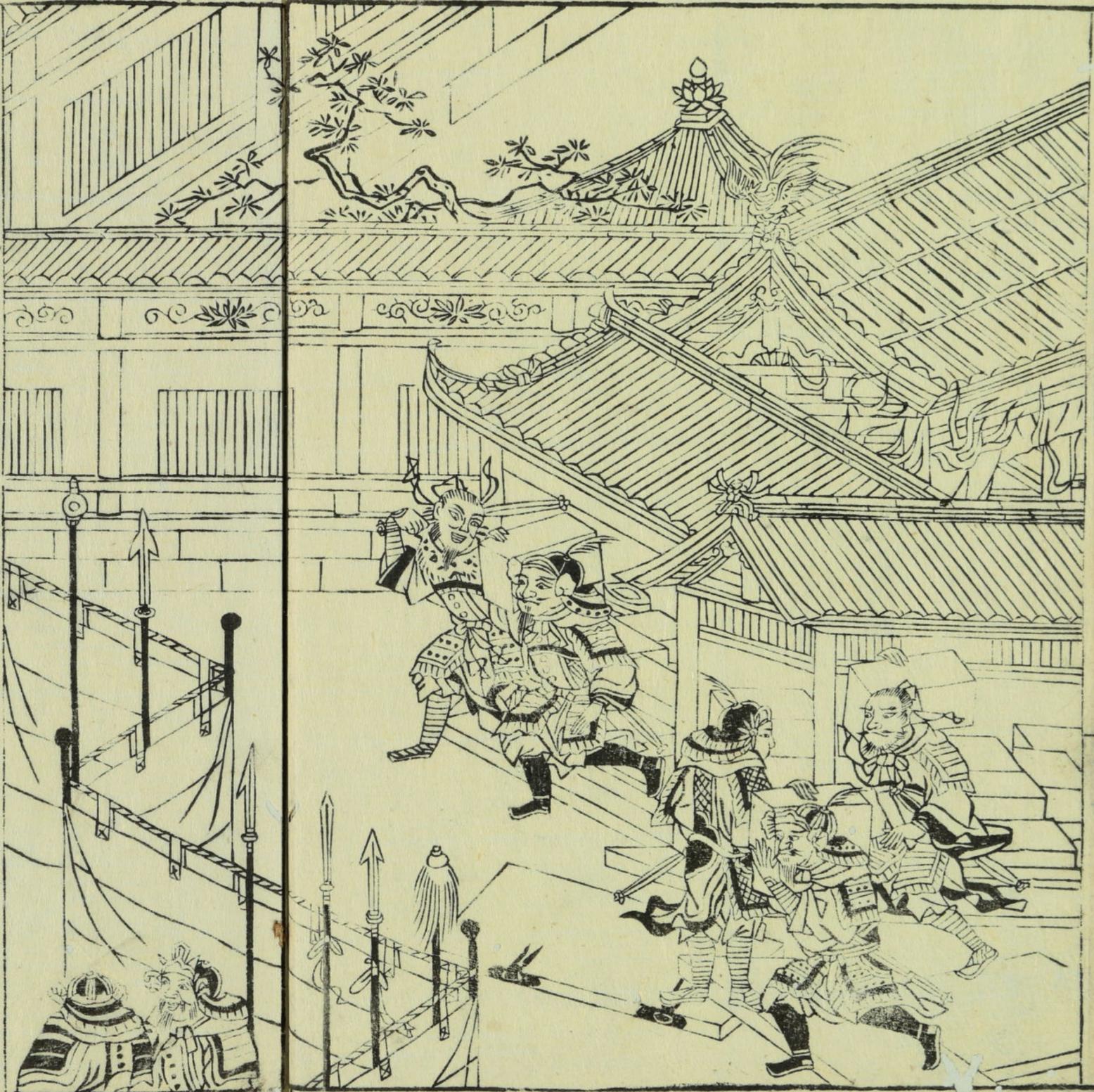
九

分とてより諸侯と皆治りて楚の項王と其強
 合ふ此天楚とて此の討ありて機を固めて討て
 らんと謀めて大軍と備へて其の智略を廻り
 て項王と垓下と追つたり項王四面より楚歌と
 うそを奏して大に驚く楚はもや皆漢の志ありて
 運乃ち極ありとて其の夜に酒宴と始む愛せり
 美人あり虞氏とて其常の幸せられくお侍り
 駿るあり驢といふ常の乗て軍と決らざる
 項王悲歎恍惚して自討と為りて曰力乏と抜氣
 せよ蓋しむ討ありて驢遊せし難ゆに奈何か
 するや虞よ虞よ若といふ美人虞氏も昔も

項王位教のりり項王又るよよ上て八百餘人とい
 つまそてあてゆく漢の軍追りけり淮の水とまら
 時ハ項王の勢兵百餘人東城よる討ハ又二十八騎
 とあり項王脱えざるやと度て曰吾昔と記す
 より今よ八歳身七十餘戦當る所の名ハ破る今
 こに困と此天より我とをばあり戦乃ち罪も此と
 文ばる漢の軍せん三たび戦うる三たびせん敵の
 大ね一人と斬んとて戦ひが漢の漢のちりて人首
 とする赤泉侯といふ人逃りけりは項王固と懸
 て此くば赤泉侯人馬供も終るに碎易とて
 七八里と逃るるすく殺す人と切殺に項王剣と

彼らより十餘年後の後、此の如く馬臺とんく
 若ハ昔ノ故ノ人ノ性也ト云馬臺西とんく
 王器とんく曰吾夢見王我頭と千金有り
 購とんく昔首とんく若ハ使よせりして自刎て
 死しり王器とんく取とんく漢王攻取と殺城
 小葬つてゆゆは後とんく程ハ概ハ寛仁と度乃
 人とかめらると仍よわん天とんくひ臣とんくひ国也
 二 蕭何定律

漢乃とんく程秦の軍よ討つて函谷関入一時法とんく
 て物とんく法とんく三章ありとんく法よ曰人と殺さん者ハ死
 人人と傷り及び盗とんく罪ハ抵さんと仕番と
 ち一秦の苛とんく改とんく弱とんく民とんく接とんくは秦の民とんく
 恨よとんく収とんく事の夷いま、附とんく也、昔華いま、り、
 始とんく三章の法とんく、姦とんくと御とんく、是ハ是ハ
 蕭何秦の法とんく據據とんくても、時よ、官とんく、き者とんく取て律
 九章とんく化とんく、程感陽とんく、時法とんく、皆とんく、
 各財物とんく、府よ、とんく、取とんく、に蕭何先入とんく
 秦の丞相、御史の律令、圖書とんく、恨とんく、これとんく、藏せ
 つとんく、程、具よ、天下の要害、民、衆、乃、
 人、と、知、く、
 故よ、程、後、よ、即、て、功、と、備、
 封、と、約、
 蕭、何、が、

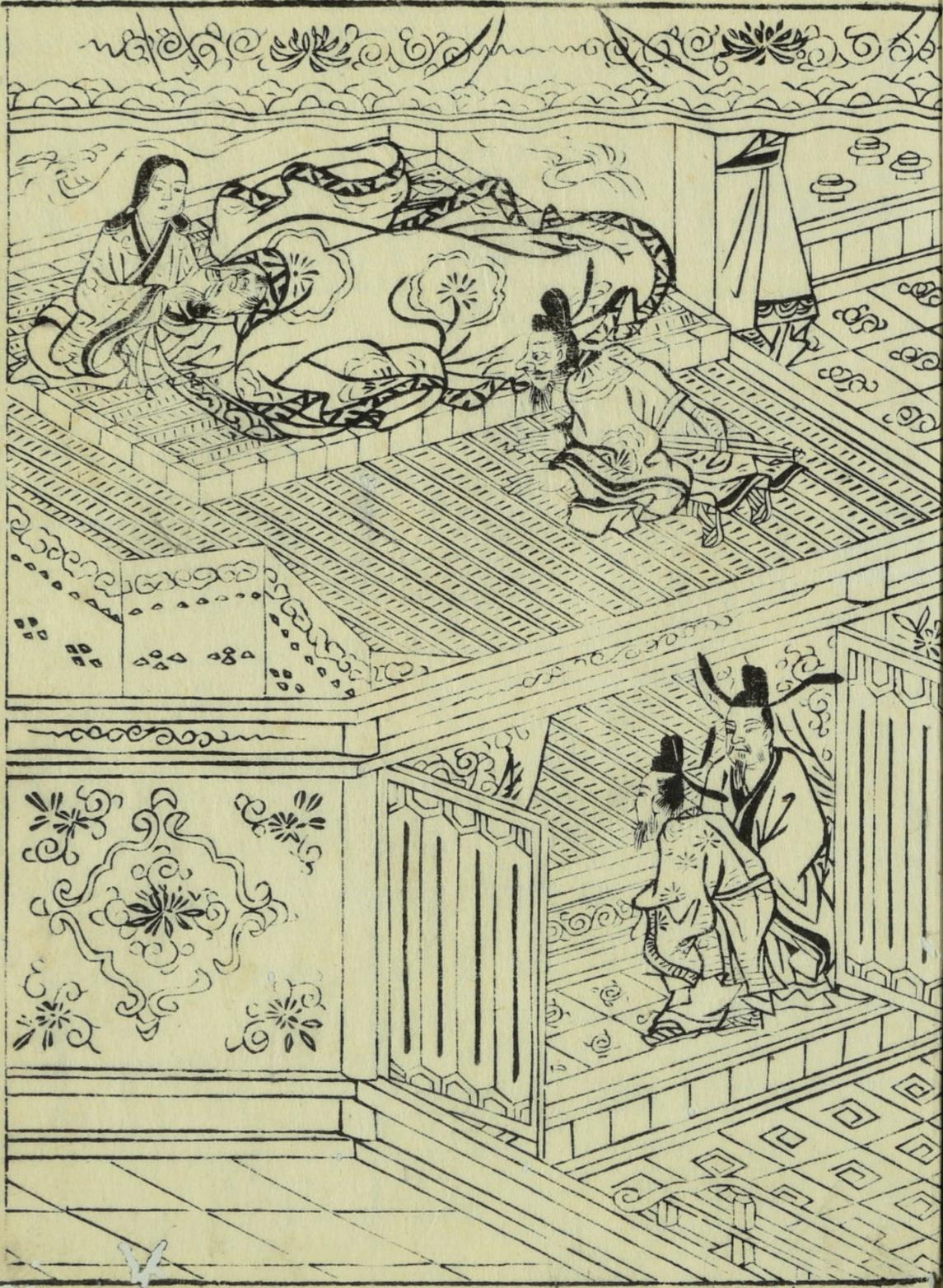


切の最盛るといひ、先程一妻よ鄭侯よ封後人

三 樊噲排圍

樊噲ハ多祖と曰ふ人なり、時ハ狗頭
 屠とて、事とひる祖よ後とて、定じ切を
 以て舞陽侯よ封せり、祖背て病て人を
 をもて、林申よ外、水戸とて、ちよものよ、

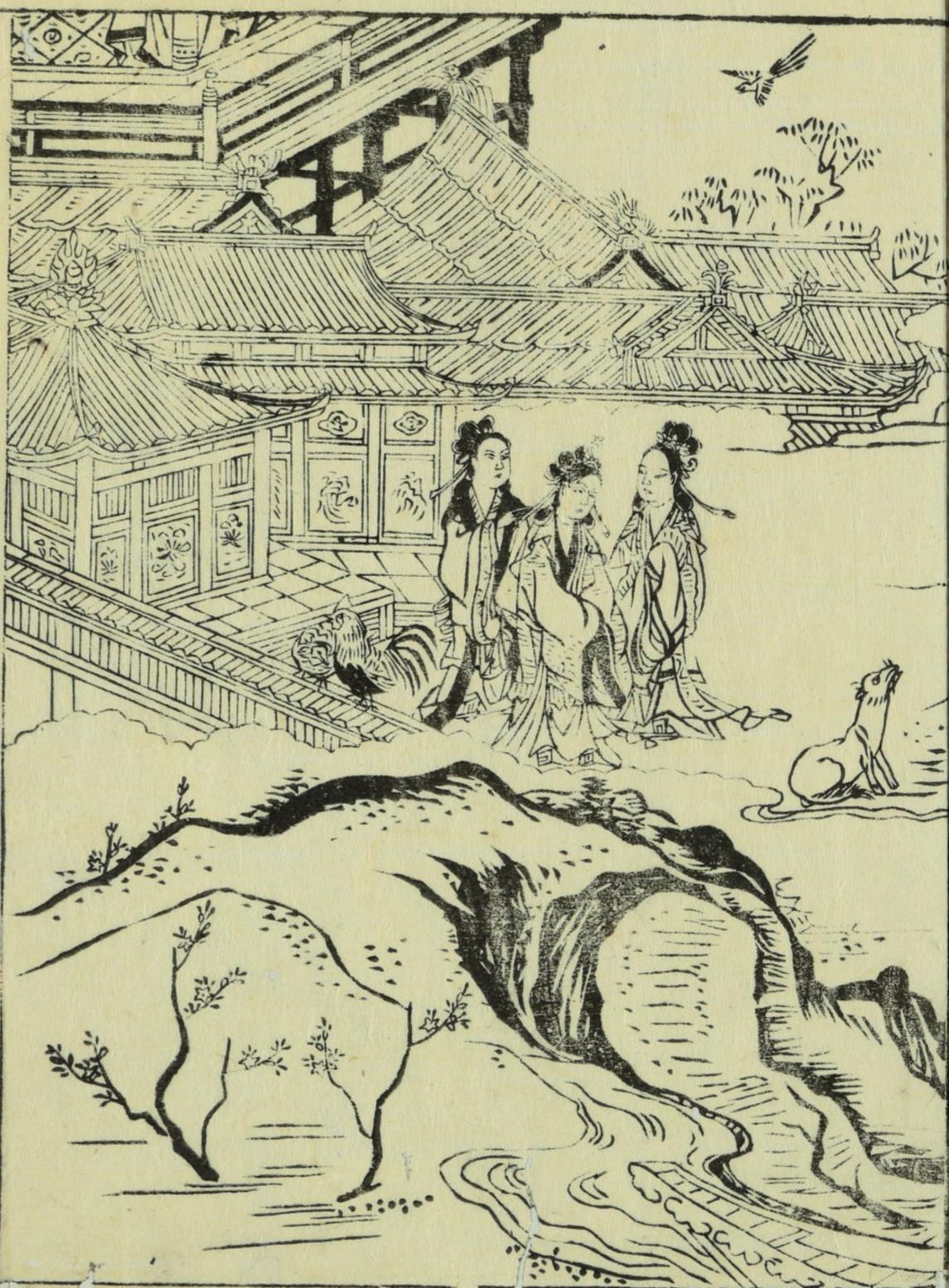
臣と入るありきむ群臣遊覧の絳灌亦も敢
 て入事なれと十餘日よあり時子樊噲これ
 殊りんと聞と排して直と入沛の天臣も隨て入ぬ
 之れ獨一乃官者子柳て帥し沛の樊噲灌と流
 して曰沛下沛下といふ程を臣等と豊沛といふ所を
 起く天下と云むと時れありは後仕ありとありび
 かより一々令天下已も定て何ぞさまで備人
 向や且陛下その上疾甚く臣等と云て万事を後命
 一はそれ何の役ありをさる一の官者と絶人けや
 且智趙るるものと見すやとよりこむ程笑て起ぬ
 ひる接り政とす所よ趙るる事紙とすやとよりハ



趙の秦の始を遊遊乃寵臣をばは謀
 及して秦の滅亡とせり今さしての紀
 人れ官者と相知り又趙さうとくあんと戒
 先さるあはく一徹も忠臣なるくれる程も
 相終戦切と遂大平は成くと群臣よおん
 りののとくいのあつれ事徹も人臣の程よわ
 四 桃源之圖

陶潜が桃花源の記は晋の太元中武陵と
 下の人魚と捕て溪に縁て移居のをさ
 とすれりやをくゆくに忽桃の花の林あり
 て岩と夾さしよ逢り数石歩の中新なる樹と

なく只桃乃芳華鮮美くを落葉續紛
 とみざり漁の人甚あやんで後すんで
 林ののりりと窈窕んと林あり水の源は
 山あり山とるまは小さき池あり
 といふははけ入りの穴へ行て人といひ社と
 てまはよりぞ入るけい入るめハ捨て後
 終人と母の復行と教十歩して豁然とひ
 わづかして周るありと士比平は
 屋舎ありて儼然と夾りたり良田あり
 池あり桑竹の属とありて阡陌交り
 やなる修好おゆゆを中の人
 けは来りて後

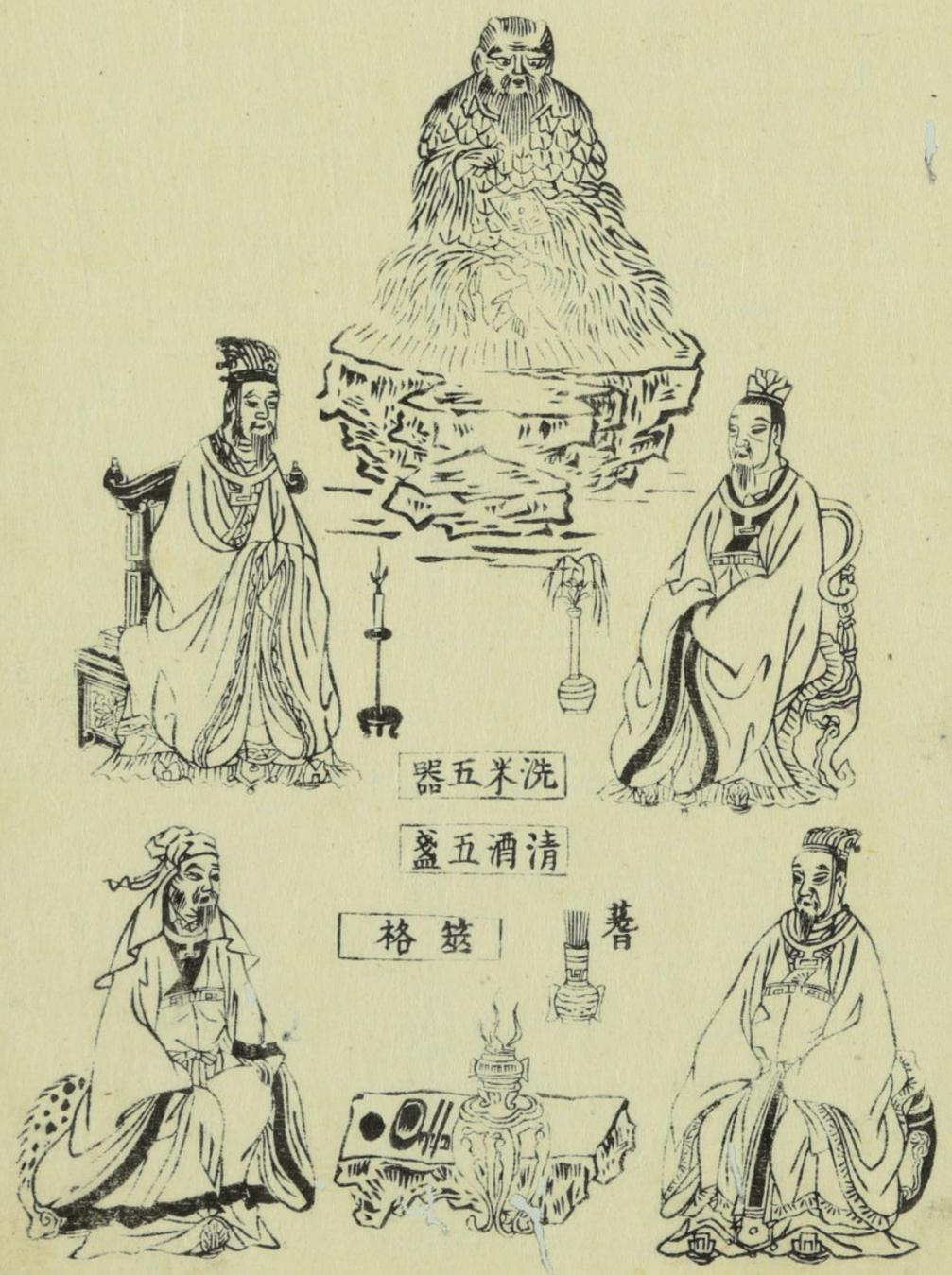


五聖人

凡の聖人と圖して崇敬するハ易經の全經ハ五聖
 人の著述なるハなりそれ易此一字ハ日月の二字と
 合せて此より日月の陽月を陰月を月を一月一陽一陰
 循環して山と谷と陰陽循環の理此真なる所ハ神
 妙不測也人知るとく微よ及さら処いまた卦爻
 子のつれねと天地の中ハ具定する所ハ天地自
 然の易とハ抑ハ緑花ハ紅よ善の爻よさる稲と
 黄よ實赤く秋の多よをる一ハ一ハ常人としてハ
 善ハ凡常枯乃極り易もつるも亦復も天地自然の
 然りて是れ易の道理也人知らば亦復も亦復も

乃とくは少人よ上右此伏羲遠ハ物よ求り所くを
 爻よ所くハ卦と化り所よ是伏羲の易ありとされと
 是卦よりありて辭ありとくは周もつくと文
 王一卦とくは辭と繫られたり故よこれを繫辭
 とし卦ハ爻又は繫辭ハ經のとくは是爻よ
 易ありと復又周も且一卦とくは六爻ありハ人よ
 是六爻の一爻つるは河と繫られたりこれを爻の辭
 とし爻卦とハ☰☷ハはりの爻とハははりありつと
 乃とくは日月ありのとり也と復孔子古乃と聖人
 此易の理と發明し所ハ十傳と化り所よ是と
 十翼ともしよかくのとく伏羲文王周も孔子の

聖と歴て易ハ成就せり故に並に記せば聖人
 像と急る也但ハ聖人といハ大伏羲文王周孔
 子子禹王と云りて描り是ハ易の理をかゝく
 神高し洛書ありゆへ今五聖人といふあり
 易の合璧は並に記れ祭文ハ大禹と加へて
 聖人乃名と唱りあり其て並に記するは
 け五聖の徳と徳を掛し心と情と平度と
 らん又みざるは帝の時急るは次帝といは
 是天下万世の法とて是良父子の道といは
 及に修へば大平子孫まつるはとてしけり
 久しとすまよりと鬼と教ひと徳と



洗米五器

清酒五盞

著

我父母と仇と化の父母と安らふりてけ
五聖と我の考の圖像は混するハ是忠と
て俗人と諷ふとのあり親は孝あり人と愚人
とて終りハ行儀極く是より人道次第
絶く人面獸心乃族とありん志いれ我ハ此の
命はあり彼も一も恐まんや置け道よかり
んやいり是とわげく日月一を天よひう
唾く頬とけがうぐく一向敵はふえの性人を
ゆべりある人孔子の像と察よりみまのた
みまは西と清の屏風よりをれどありん
ありて屏風よありて

わがわがばこれありと愚人よ

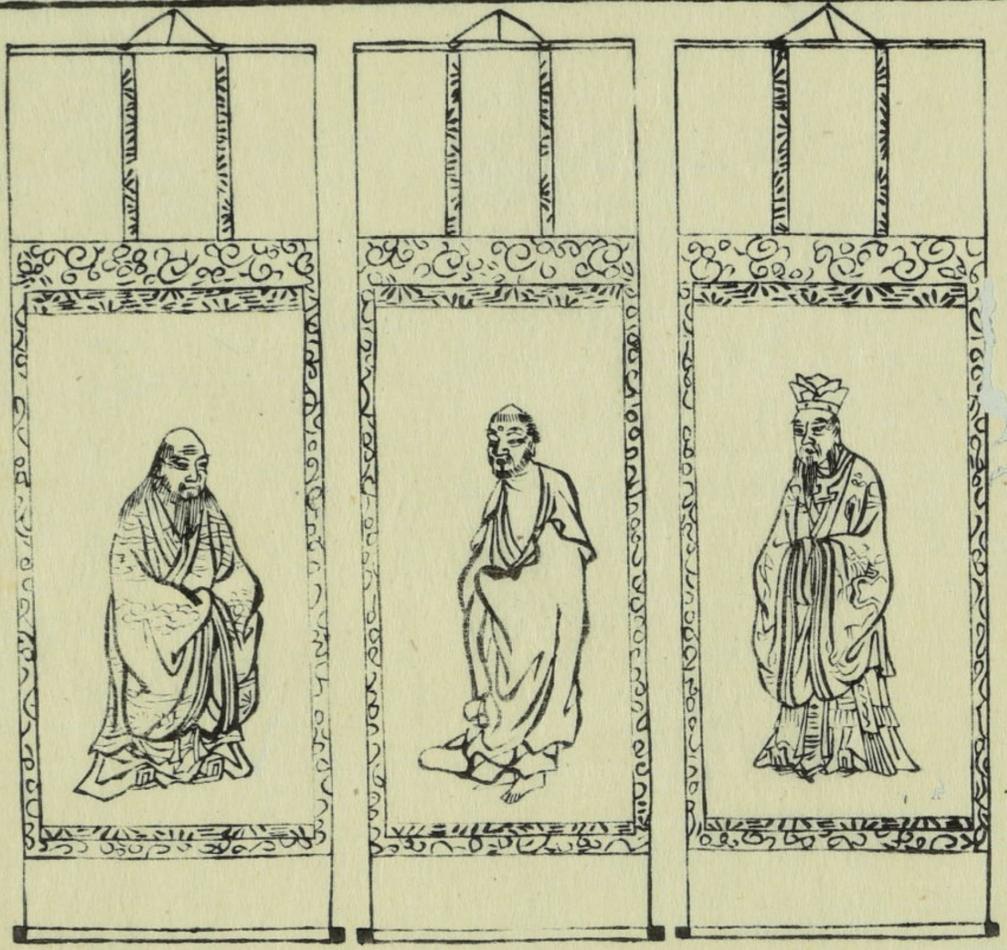
飯くよと此ハ朕よとこめ

それ外とみらとまりととととなりはより道
とつそ乃穴ありといふとととこれと人
と人と成りてほくも古分くありと人の
つとこありきとありてや

七三教を人

古人之聖人を描きて是を三教一彼
乃見より起り彼は道取をれハ理を
かじりいん但儒ハ儒よ佛ハ佛よ神老ハ
老よ神と各家とありとハを又別あり

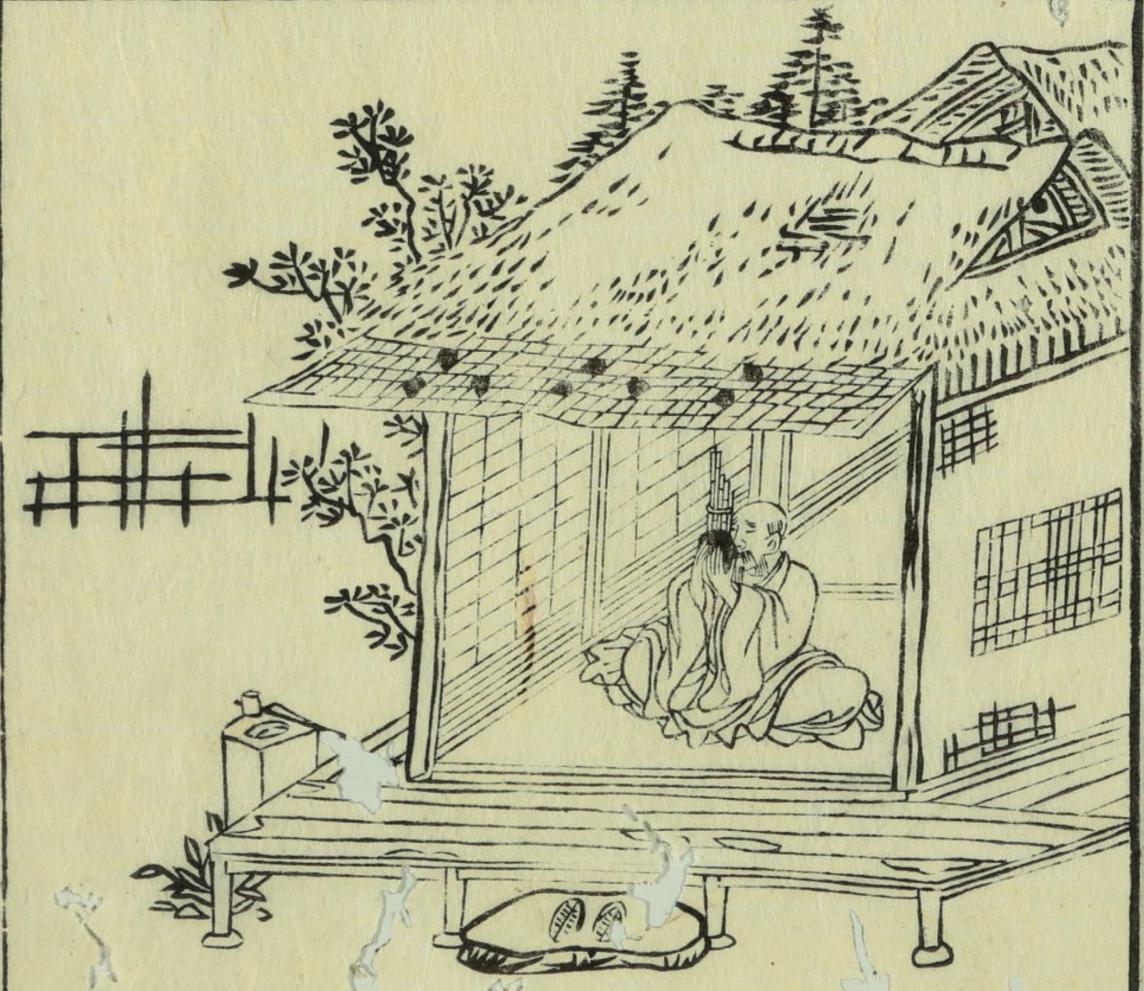
古來之教之致と論する人甚多し如く居士の
 曰く教強く名と安んねば加室と摩竭と掩ふ
 としるハ孔子の儒の黙して識といふよりハ老聃
 の謂く大寂ハ訥くが如くといふも二つありて
 細く小理と密行して天下と脩るよりハ儒より大なる
 をあく性とおきて生と死と超るハ釈より大なるハ
 かく存よ後しく三文と評するハ老より大なる能く
 とありつるハ各偏執とあり且混死より大なる儒
 釈の二つより見けく彼中たと失りやとこれに
 乃岐の多き人ゆと欲き素き糸の深んると想
 しこまといは備物と云はあり故よ之教之致の論起



けり学者の心
 けり孔子の傳
 知人し一は圓ハ
 此法より工出たり
 故よ釋迦と中
 そとせり然も
 孔子とたや老
 子とたは此之教
 のより老と若も
 こそよりあふし

ちきにいりいりいり小塔と百部一夫をんあ
 けれく小塔あはね大内とまきれいて暖
 織の奥れ斤村戸はあくまのひて経の
 とまき羅山文の秋とるけを好ひ仲の
 のま料の西ると賜りて初のてくうのゆき
 しま小塔ハあひなを記琴のよまあくつを
 ありんをくれありーうごりつとあまあひ
 孫一孫あまつとてぬひもーあまあまひ
 大内へあへ入まりけりや
 十 鴨長明
 鴨長明ハ河合宮の氏人あり和哥と好む緑竹と愛

次は日野の
 山をまき方丈
 水記と著守常
 に一室と作ら
 縦横十笏言
 させ人よ西
 綯深自在
 一東西南北
 意乃遠近
 されと移して
 きてまゆり



昔繪入
 三十一
 三十四

